

阿部静枝、歌集『霜の道』と戦後の評論活動は、短歌史においてどう位置づけられたか

・筆者の先行論稿

- ①「阿部静枝年譜・著書解題」『ポトナム』（阿部静枝追悼号 1975年2月）
- ②「女性歌人たちの敗戦前後」『扉を開いた女たち』（砂子屋書房 2001年9月）
- ③「内閣情報局は阿部静枝をどう見ていたか」『天皇の短歌は何を語るのか』（御茶の水書房 2013年8月）
- ④「阿部静枝の短歌はどう変わったか～無産女性運動から翼賛へ」共著『題未定』（新フェミの会編 刊行予定）

・新・フェミでの報告

- ①戦時下の阿部静枝～情報局資料を中心に（2006年4月 新フェミ報告）
- ②阿部静枝歌集『秋草』から『霜の道』へ、その空白～一九四五年敗戦前後の著作と活動の軌跡から見えてきたもの（2012年12月8日 新フェミ報告）

・配布資料

- ①レジメ（3頁）
- ②阿部静枝略年譜：「歌人・社会運動家 阿部静枝—その人と生涯」展（2014年9月8日～10月24日）資料から（「友愛労働歴史館」企画展「同盟結成から50年—その意義を探る」（2014年9月～2015年2月））
- ③第1表『短歌研究』各年1～12月の短歌作品・散文などの女性執筆者割合（%）の推移（1942～1962年、2008、2015年）
第2表『短歌』（角川）1月号に見る10年ごとの女性執筆者数とその割合
第3表『短歌研究』三月号の登場女性歌人の推移
第4表『短歌研究』『短歌』の女性出詠者・執筆者割合（%）と実数（一部）と阿部静枝主要短歌評論と歌壇の動向（1945～）

・阿部静枝、歌集『霜の道』と戦後の評論活動は、短歌史においてどう位置づけられたか（目次）

1. 敗戦直後、静枝の発言
2. 『霜の道』のフィクション論議の蔭に
3. 戦前派としての発言
4. 女性短歌前進のための発信
5. 短歌ジャーナリズムにおける女性歌人進出の推移
6. 阿部静枝の「虚構」について、近年の読み直し
おわりに

1. 敗戦直後、静阿部静枝の発言

1) 数少ない戦争協力への反省

注1

- ・戦争に面従しつつ全うせる身の置きどころ野に耕せり
- ・満州に行けとわが説きぬ征き拓き斃れたる人目に頭ち迷ふ
- ・孤りいで耕す鋤の音澄みて秋日はしろし罪あるわれか（街『人民短歌』1946年3月）

安藤佐貴子（一九一〇～一九九九年、『歌と観照』を経て、尾関栄一郎と結婚、『遠天』に参加）：

（安藤佐貴子「女流短歌と社会性」『日本短歌』1948年12月）

鹿野政直：安藤佐貴子に見る「屹立する精神のみが、フェミニズムにとっても、人々にとっても未来を拓くであろう」（『現代日本女性史—フェミニズムを軸として』有斐閣 2004年）

2) 女人短歌会批判への反論

静枝らが立ち上げた『女人短歌』の自らの評価：男性歌人たちの揶揄に対して

「女流歌壇展望」『短歌声調』（大橋松平編集発行 創刊号、1950年1月）

2. 『霜の道』のフィクション論議の蔭に

- 1) 静枝の第二歌集『霜の道』「あとがき」の問題提起
女性読者からの送られてきた作品の収録（自作自演） **注2**
女人短歌 16号の無記名短歌、静枝の作品をめぐって **注3**

2) 歌壇の反応

- 3) 『秋草』以降、発表した作品と『霜の道』収録の作品との照合
(収録されなかった大政翼賛的な作品) **注4**
(なぜ戦時下の作品が省かれたか)

4) 大量の戦時下の作品が収録されなかったほんとうの理由

3. 戦前派としての発言

「座談会・戦前派大いに語る」(佐藤佐太郎・窪田章一郎・阿部静枝・岡山巖)『短歌研究』1950年5月)
(「短歌の不幸」だったか)

「歌壇の魅力」『日本短歌』(1950年6月)

(歌壇の現状認識批判)

4. 女性短歌前進のための発信

◎短歌と社会性『短歌声調』一九四七年九月

◎女流歌人の視界～何が新しいか『日本短歌』一九四八年八月

- ・桑の葉を食まずなりたる蠶のからだ透きとほりゆくあの種の切なさ(五島美代子)
- ・黄のいろに光はながくとどまれる秋野の幸も他国のごとし(生方たつゑ)

女流短歌論～婦人と短歌『短歌研究』一九四八年一月

女流歌壇展望『短歌声調』一九五〇年一月

婦人の短歌と平和『短歌研究』一九五〇年六月

- ・護り抜かむ殉国の日よりも生きがたき世にあること日々あらたに(長沢美津)
- ・二つなき命をむざと落とししはその人にして他は関りあらじか(川上小夜子)
- ・焼あとは無表情に白くひろがりて月ただひとり空に狂へる(五島美代子)

◎短歌に感じる象徴性『日本短歌』一九五三年五月

- ・われのもつ仮面のひとつをあばき出し白蛾苦しみにそりかへりつつ(森岡貞香)
- ・白百合の花びら蒼み昏れゆけば拾ひ残せし骨ある如し(五島美代子)

女流短歌の時代性『短歌研究』一九五三年一月

◎座談会・女性短歌の前進のために(阿部静枝、五島美代子・生方たつゑ・葛原妙子・山下喜美子)『短歌』一九五四年九月(戦後女性短歌は隆盛／中城ふみ子の評価など)、

5. 短歌ジャーナリズムにおける女性歌人進出の推移

第1表『短歌研究』各年1~12月の短歌作品・散文などの女性執筆者割合(%)の推移(1942~1962年、2008、2015年)

第2表『短歌』(角川)1月号に見る10年ごとの女性執筆者数とその割合

第3表『短歌研究』三月号の登場女性歌人の推移

第4表『短歌研究』『短歌』の女性出詠者・執筆者割合(%)と実数(一部)と阿部静枝主要短歌評論と歌壇の動向

6. 阿部静枝の「虚構」について、近年の読み直し

阿木津英「女人短歌会」『二十世紀短歌と女の歌』二〇一一年四月

佐伯裕子「戦後短歌の時間軸-阿部静枝・葛原妙子・斎藤史」(今、読み直す戦後短歌V再録)『短歌研究』2012年7月 **注5** (『女人短歌』創刊号の静枝作品)

高木佳子「今、戦後短歌を読み直すV」『壇』2012年2月27日

花鳥侶(かとりもも)「詩客:短歌時評第42回」2012年3月9日

おわりに

注1・戦ひに敗れて身ひとつ残りたれ移る世見るを生くる甲斐とも

- ・生きたしと壕にひそみて生きおほせ戦ひてはてし秋にあふかも
- ・国貧しく山をあらはに木は伐りぬ長雨降ればすなはち水漬く（「この秋」『短歌研究』1945年12月）
- ・春陽照れど顔に血汐の紅ささず敗れたる国起ちおくれつつ（旅路『短歌研究』1946年4月）
- ・国敗れて吾もうつろひぬ机おき読み書き想ふ窓ひとつなし
- ・かつて世になかりきといふ戦争の惨害を身に刻みて病めり（夏畑『日本短歌』1946年7・8合併）
- ・都心への直線舗道風と共にジープすぎ行き落葉まるべり
- ・宮城の小暗く深きをたふとまず侘しむ民の心変りや
- ・雲の上に主権をおきてひれ伏せる暗愚の歴史閉じて起つべし（「進駐軍のみる風景」『八雲』1946年12月）

注2「女の山路」『苦しめど克ちてゆかん』（万里閣 1943年5月）に付せられた短歌作品（五一首）：

（男に捨てられて、子を養家に預け、満州に渡って教師をしている「女性読者から著者への何通かの手紙」）

- ・子を負へる女に傘を分けかざししぐるる巷に遠き子を想ふ
- ・軽便線の汽車の車輪を洗ふばかり波打ち寄せて岬狭まる
- ・夕暗き車窓に涙拭くとせず抱き掲げらるる子を見凝めをり
- ・ひそかに生み落とし人に託す子の貧しき眉目あげて笑へる
- ・生みし児は他人に任せ顔拭ひ世に生き行くは復讐のごとし
- ・ひとりして子を生むと受けし人の恩忘じ難けれ屈辱にがく
- ・寄る波のつめたさに馴れて拾ひ行く蛤貝はいまだ幼し
- ・たはむれつつ抱きとりし子久しかりき母の両腕に高く掲げぬ
- ・母ありとてなさけあたたかきわれならず子がもつ母の概念を怖る
- ・飛行機を欲しと長泣く子を見据え泣かせつつ恨み晴らすがごとし（飛行機⇒三輪車）
- ・男なれば泣くなど利己主義の母わが罪を蔽はんとすや
- ・世に人に気兼ねは要らぬ女あるじ預けおきし子を今ぞわが許に
- ・わが息子を褒め給ふなる受持の先生といつまでも話してみたし（わが児を⇒わが息子を）
- ・朝夕にわが腹立つこと多き子を先生は褒め給ふよき先生かな

注3・混血児生みし否めば黒杭に生ゆる黒茸わが踏みにじる

- ・外に出ればあいの子と石打たるる子の傷の血も涙も黒きを流せ
- ・あいの子の黒とはやされ泣ける子を抱くわがからだ棘■立ち慄ふ
- ・人間の種にかかはる智恵もたぬ犬ら素直に吾子と遊べり
- ・むしろわがけものになりたし犬たちと戯れつつ臭く智慧足らぬ子よ（『女人短歌』16号 1953年9月）

注4・敵国らの青き眼がさげすめるこのわが国か守り遂ぐべし（「望郷」『日本短歌』1941年1月）

- ・戦鬪に命打ち込み澄み冴ゆる男性をこそ今は羨しめ（「思念」『日本短歌』1942年3月）
- ・夜思ひ朝窓に書く戦時婦道国のゆくてにわれもおくれず（「戦ひ明るし」『歌集新日本頌』1942年11月）
- ・管制の地上暗ければさやかなる星空にこころひかれて歩む（「戦ひの下に」『短歌研究』1943年6月）
- ・来る敵らのすべてを討ちて帰すなき島と国土をなして勝つべし（「国土」『短歌研究』1944年4月）
- ・死傷せる人をおもへば倒れし樹起しつつ哭く勝たねばならず（「北九州にて」『短歌研究』1944年11月）

注5・子殺しの母に語らすと夕浪の磯曲の家をたづねあてたり＊磯曲（いそわ）磯の入り組んだところ

- ・孤児ら守る女史もあるなれ浦和充子がわれに親きか
- ・母よ母と夢に呼ばるれば夜は覚めて子を殺したるうつつに真向く
- ・孤児ら守る女史もあるなれ子殺しの浦和充子がわれに親きか
- ・罪犯せる女の話書き終り浜の湯宿に孤独すがしむ
- ・死にたければ死なん毒薬秘めもちてわが運命はわたくしすべし
- ・法隆寺焼けし惜しめどもわが家が失せたるならねば悼みしづけし
- ・めりめりと毛根切りて草抜きつつ残酷性を充たすがごとし
- ・雑草にも名あれば抜くを惜しみしは春浅くして猛からぬころ（「雑草」『女人短歌』1号 1949年9月）